大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪あそ歩 OSAKA ASOBO®

近松門左衛門『曽根崎心中』の道行を辿って
～未来成仏疑ひなき　恋の手本となりにけり～

西鶴、芭蕉と並び江戸時代元禄期の三大文豪といわれた近松門左衛門。その近松の世話物の名作として知られる『曽根崎心中』の主人公・お初と徳兵衛が歩いた道行のルートを辿ります。苦界に落ちた可憐な遊女。憂き世の柵に雁字搦めの男。そんなふたりが出逢ったならば？恋と義理と人情に悩み苦しんだ男と女の運命は、蜆川だけが知っていました･･･。

◎近松門左衛門

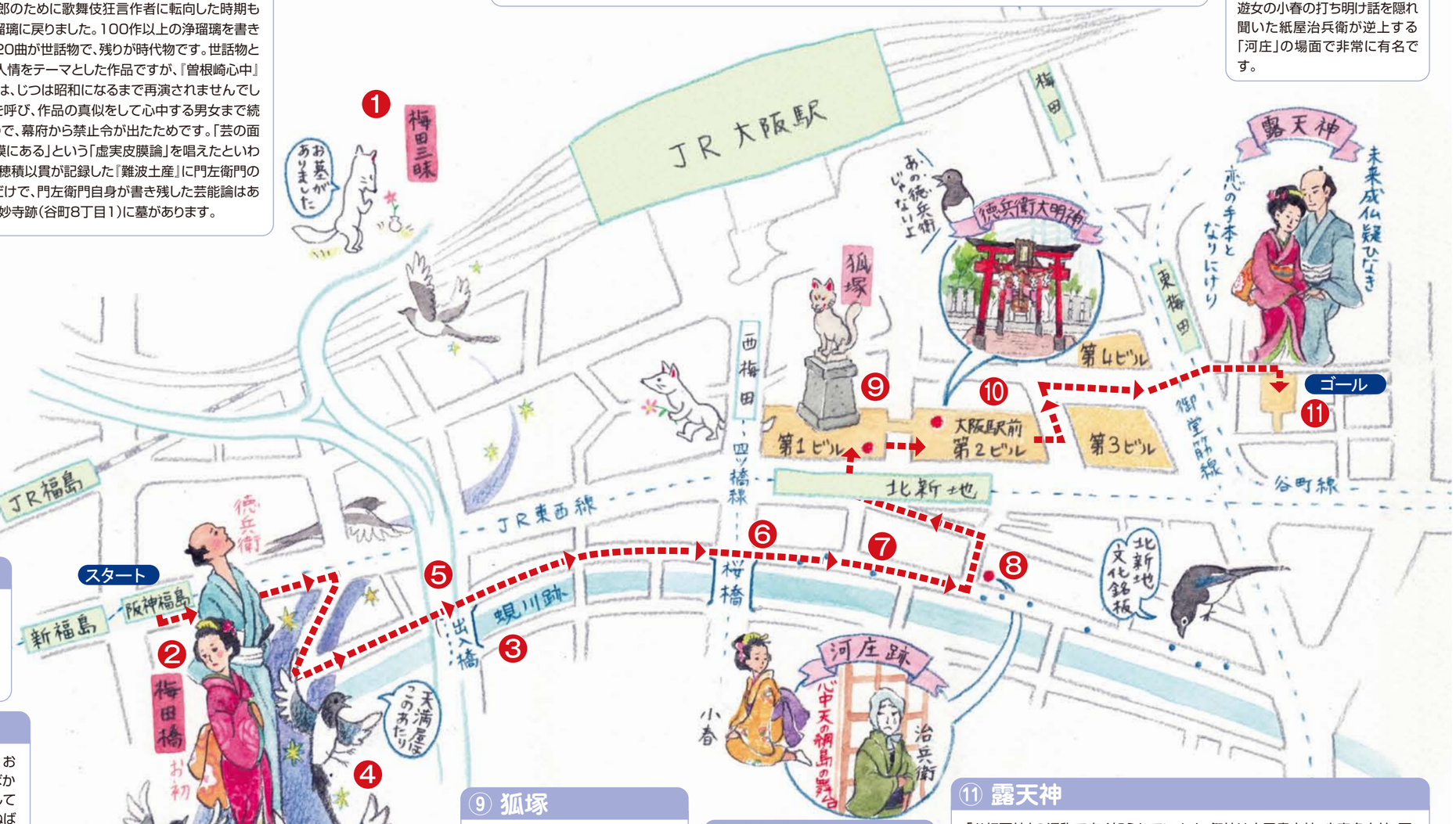
近松門左衛門（1653～1724）は江戸時代の元禄期に活躍した人形浄瑠璃と歌舞伎狂言作者です。本名は杉森信盛。生まれは越前国といわれています。竹本座に属する浄瑠璃作者で、希代の名優と言われた初代坂田藤十郎のために歌舞伎狂言作者に転向した時期もありますが、再度、浄瑠璃に戻りました。100作以上の浄瑠璃を書きましたが、そのうち約20曲が世話物で、残りが時代物です。世話物とは町人社会の義理や人情をテーマとした作品ですが、『曽根崎心中』『心中天の網島』などは、じつは昭和になるまで再演されませんでした。大変庶民の共感を呼び、作品の真似をして心中する男女まで続出するようになったので、幕府から禁止令が出たためです。「芸の面白さは虚と実との皮膜にある」という「虚実皮膜論」を唱えたといわれていますが、これは穂積以貫が記録した『難波土産』に門左衛門の言葉として登場するだけで、門左衛門自身が書き残した芸能論はありません。大阪市の法妙寺跡（谷町8丁目1）に墓があります。

⑦ 北新地文化銘板

北新地は江戸中期、河村瑞軒による淀川の改修によって開発された堂島新地（1688）と曽根崎新地（1708）をルーツとして、米相場の中心地であった堂島米市場に隣接していたので、商用の武家や町人を顧客に大いに繁栄しました。北新地文化銘板は北新地300年の歴史や、まちの物語をパネルにしたもので、新地本通の遊歩道に10点ほどを設置されています。

⑧ 河庄跡

『心中天の網島』に登場する色茶屋・河内屋の跡地です。河内屋庄兵衛の茶屋で河庄と呼ばれる。遊女の小春の打ち明け話を隠れ聞いた紙屋治兵衛が逆上する「河庄」の場面で非常に有名です。



① 梅田三昧

江戸時代大坂の町の周辺には、大坂七墓といわれる古いお墓があり、梅田墓地はその1つです。別名「梅田三昧」とも呼ばれました。

② 梅田橋跡

『曽根崎心中』の「徳兵衛・お初の道行」では「此の世のなごり。夜のなごり。死にに行く身をたとふればあだしが原の道の霜。一足づつに消えて行く。夢の夢こそ哀れなれ。あれ数ふれば暁の。七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の。鐘の響きの聞きをさめ。寂滅為楽と響くなり。鐘ばかりかは。草も木も。空もなごりと見上ぐれば。雲心なき水の音北斗はさえて影映る星の妹背の天の川。梅田の橋を鵲の橋とちぎりて。いつまでも。我とそなたは女夫星。かならず添ふとすがり寄り。」と描かれています。「鵲の橋」というのは、七夕になると鵲は織姫と彦星の間をつなぐ掛け橋となって天の川を渡すという伝説をモチーフにしています。

③ 蜆川

近松の時代には、新地本通に沿って、蜆川（曽根崎川）が流れていました。明治42年（1909）の北の大火で焦土となり、廃屋の瓦礫などを川に捨てたことで埋められてしまいました。近松門左衛門が描く浄瑠璃には、北の新地がたびたび登場しますが、なかでも堂島新地と曽根崎新地の境域を流れる蜆川は、これに架かる橋とともに重要な作品のモチーフとなりました。

④ 天満屋跡

『曽根崎心中』の「蜆川新地天満屋の場」の舞台です。敵役の九平次がやってきたので、お初が縁の下に徳兵衛を隠しますが、すると九平次は徳兵衛がいないと思って、ここぞとばかりにお初の前で徳兵衛を罵ります。縁の下で歯軋りする徳兵衛ですが、悔しい思いをしているのは、お初も同じでした。そこで「証拠なければ理も立たず。此の上は徳様も死なねばならぬ品なるが。死ぬる覚悟が聞きたい。と独り事になぞらへて。足で問へば打ちうなづき。足首とって喉笛なで。自害するとぞ知らせける。」と、お初は独り言と思わせて縁の下の徳兵衛に「死ぬ覚悟が聞きたい」と問いかけると、徳兵衛は大きく頷いて、お初の足首を取って自分の喉笛をなでて、心中する覚悟があることを知らせました。

⑤ 出入橋

明治38年（1905）に阪神電気鉄道が大阪-神戸間に開通しましたが、その当時の大阪の起点は出入橋でした。当時は、まだまだ船を利用して大阪駅まで荷物を運ぶ海運が盛んで、梅田運河（堂島川に通じていました）に架かる出入橋は交通の要所でした。現在は埋め立てられていますが出入橋からは、かつて梅田運河があった様子が窺えます。出入橋の東詰には創業昭和5年（1930）の出入橋きんつば屋があり、橋の歴史を見守ってきました。

⑥ 桜橋

蜆川にかかっていた橋です。「北の大火」で消失しました。現在の堂島上通りは蜆川の南岸にあたります。『心中天の網島』の「名残の橋尽し」では「別れを嘆き、悲しみて、後にこがるる桜橋」と描かれています。

⑨ 狐塚

大阪駅前第1ビルの屋上に狐塚があります。今から約600年前、土地の豪族が一家の守り神として祀ったのが始まりといわれており、昔から地元の人達に愛されてきたものです。北の新地を少しでも外れると誰もいない、狐狸が住むような裏寂しい光景が展開していました。お初と徳兵衛は、北の新地から離れて、梅田墓や狐塚などを遠目に見ながら、曽根崎の森の中に入っていきました。

⑩ 徳兵衛大明神

縁起によると、その昔は曽根崎・蜆川のほとりに祠がありました。参拝する人も無く、荒れるにまかせていたのですが、ある時、徳兵衛という人が住みつき、祠を手入れし、熱心に修行したところ、霊験あらたかな祠となり、参拝者がひきも切らなくなったということです。いまは、そのご縁を大切にと、大阪駅前第2ビルの有志で祀られています。

⑪ 露天神

「お初天神」の通称で広く知られています。祭神は大己貴大神、少彦名大神、天照皇大神、豊受姫大神、菅原道真です。社伝によれば、この地はかつて曾根崎洲という大阪湾に浮ぶ孤島で、そこに「住吉住地曾根神」を祀っていたとされます。創建は西暦700年頃とされ、「難波八十島祭」の旧跡の一社とされています。社名は、菅原道真が大宰府へ左遷される途中に、ここで都を偲んで涙を流したから、また梅雨のころに神社の前の井戸から水がわき出たためともいわれています。元禄16年（1703）に境内で実際にあった遊女と手代の心中事件を題材として、近松門左衛門が『曽根崎心中』を書き、そのヒロインであるお初の名前から「お初天神」と呼ばれるようになりました。原文では二人の最後は「苦しむ息も暁の知死後につれて絶え果てたり。誰が告ぐるとは曽根崎の森の下風音に聞こえ。取り伝へ貴賤群集の回向の種未来成仏疑ひなき恋の手本となりにけり。」と描かれています。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局　電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。　http://www.osaka-asobo.jp　または　大阪あそ歩　でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。